

発表4 「舞踊と音楽」 山口 修 大阪大学名誉教授

山口修です。私は与えられた課題が「舞踊と音楽」ということで、これはもう少し絞りたかったのですが、とりあえず饗宴の場、時、儀礼性、あるいは身体性といった観点から2つの関係を見ていって、併せてわれわれ研究者としてどういったことが可能か、少なくとも私がこれまでどういうことをやってきたか、あるいは現在はどういうことに力を入れてやっているか、といった研究者の立場ということをもっといければと思います。

まず私がここ14、15年自分自身で決めたこういった考察のための準拠枠、いわゆるframe of referenceという考え方の基本になるものは、岩波講座の『日本の音楽・アジアの音楽』というのを1988年から2、3年かけてやり出しましたが、そこの第一巻に私が出した図が皆さまのお手元にあると思います。そちらに入れたのは、ごく最近の放送大学の応用音楽学の教科書に載っているもので、もともとは岩波講座で提示した一つの図です。文化、私の場合には音楽、あるいはこれを広げて芸術の領域にいろいろ広げていくことができますけれども、文化の4つの属性ということを考えます。

文化はまず人、人間が当然つくり上げるものであって、そこに体というものがなくてははいけない。そして体、心。体を使って感じる、心を使って考える精神活動。そしてそれだけでは足りなくて、周りにあるいろいろな物体・物。そこからある事柄・現象を引き起こす。そして文化というものが出来上がっていくのではないかということです。すなわち文化に備わっている身体性、精神性、物質性、現象性というふうに置き換えることができます。具体的に見ていきますと、物でしたら動植物、鉱物なども含めてそういったものに備わっている質、色、形。そこに眼を留めて、そこからいろいろな現象を引き起こすことを言います。こういったさまざまなものがございます。この中で特に時間や空間の観念というのは人間が作り出す、頭の中に描いていくということで、これが特にわれわれが問題にしている表象芸術、私の場合には「表演芸術」と言っておりますけれども、これを考えるうえで重要ではなかろうかと考えているわけです。

まとめ直しますと、つまり文化は、身体文化、精神文化、物質文化、そして事象文化あるいは現象分化といってもよろしいですけれども、こういった4つの側面に分けることができる。それも4つに分けてしまうのではなくて、4つが絡み合っているところが面白いところで、その絡み合いにこそ人間のわざというものが駆使されて、文化が現実のものとして浮かび上がってくる。現実には文化が生き生きと厳然とされるというふうに考えることができる。これが私がここ14、15年考えている文化の考え方であります。「わざ」というものを最後に全体をまとめるものとして、全体を包括するものとして取り込むところが、一番新しい最近の成果です。

さて今の図式をもとにしますと、もう一つさらに基本的な考え方として、人間が文化あるいは芸術・音楽といったところでどういう行動をとっているかということ、インプレス、

ekspresという対の概念で考えてみたいと思います。外界の刺激というものが人間の中に入ってきて、刻印されるわけです。それがインプレスです。そして人間はそれを当然外に向かって表出する、表現するということができる。それがekspres、ekspresionであるわけです。同じ考え方ですけれども、パーシーヴとコンシーヴというもの。外界の刺激を人間は感じ、感覚・知覚するということ。パーシーヴな結果、そこに出来上がったものはパーセプトということになります。今度は人間の内側から外に向かって思う、考える行為があります。つまりコンシーヴした結果からできあがるものがコンセプトである。パーセプトとコンセプトといったものが文化全般であったり、あるいは芸術全般であったり、さまざまな舞踊であったり音楽であったりということになるのではなかろうかと考えるわけです。

そういうわけで今問題にしている舞踊と音楽。演劇なども当然含めていいのですが、performing artsを私の場合は表演芸術という字をあてることにしています。これは現在の中国で使われているperforming artsの訳語がこれでしたので、それをそのまま受け入れました。一時期、幕末・明治・大正にかけて日本人が新しい漢字の熟語を盛んにつくって、それを中国人が漢字文化圏の大本として逆輸入して、伝統・哲学・美学などの漢字の熟語を受け入れたのですけれども、最近の日本人は怠っていて、カタカナ語がはびこっています。Performing artsという言葉も、何か漢字の訳語を充てたいと思って探しましたが、中国では表演芸術という漢字を使っておりますので、これを私は採用しております。

さて先ほどの図式をさらに詳しく見ていきますと、人間の体というものを使って表現する、performするわけですから、そこで当然、衣装、化粧、あるいはボディーペインティングというものが、特にオセアニアから東南アジアにかけて裸で暮らしている人たちにとって一種の意思表示であるわけですが、隈取りなども含めてあります。そして楽器を使ったりして音楽や舞踊というものを表演していく、performしていくという状況があります。

そこで表演する場というものがここで問題になります。さまざまな大道具を使ったり、あるいは場合によっては舞台というものを作ったりします。しかし考えてみると、客席があって、壇上に人が出て何かを演じる舞台という仕組みは、人間の歴史の中で比較的新しいタイプのものではないかと思えます。しかもどちらかというと、西洋的な起源の舞台構造。しかし舞台構造というものは四天王寺の石舞台でありますとか、ポリネシア、ミクロネシアなどに残っている野外に組まれた石舞台、それらのものはいろいろな形でアジア各地、オセアニア各地にありますので、舞台ということを経験や音楽の場としてつくるということ自体、当然長い歴史の中であつたわけですが、しかし近代的なホールとして、客席があつてそこに額縁のような舞台を考えるとこれは比較的新しいものであつたと考えざるを得ません。アジア・オセアニアの表演芸術においては、近代的な意味での舞台というものはあまり向いていない、ということをおは強く感じます。特にアジア・オセアニアにおいては、表演芸術・舞踊は特に野外性というものが重要でありました。もちろん音楽でいえば室内楽的なものもあるわけですが、しかし重要なのは、野外的な要素ではないかと私は漠然

と考えております。こうした場の問題を舞踊と音楽の場合には考えていくことが必要です。

ついでにここで体のことを考えたいと思います。私はこれを考え始めたばかりですが、私の場合は音楽専門ですので、耳の問題を考えます。耳は「み」というものを繰り返して出来上がっていると考えると、漢字を輸入する前からあった大和言葉で「み」というものがどういう意味合いがあったのか。漢字を当てはめてみるといくらでも出てきますけれども、非常に多義的です。身体の「身」、見るの「見」、木の実の「実」などさまざまな「み」があるわけです。そういったものを重ねたときに、大和言葉の「みみ」というものができる。そのように少なくとも大和言葉で私は身体性の問題を考えて、一つの課題として今調べているところです。

さて、表演芸術の実際ということで、先ほど申し上げた図式から言いますと、パフォーマンスというものを、これをテキストと呼ぶことにします。これは一つのあるまとまった音楽作品であったり、舞踊作品であったりします。そのテキストが演奏される場というものがあつたわけです。ある特定の場、空間的にある程度規定された場というものがあつたわけです。そこには時間的な枠組み、そして空間的な枠組みがあります。時間的なものは、例えばある儀礼の始まりは打楽器を鳴らすことによって、これから一つの表演時間が始まります。そしておもむろに表演が始まっていき、最後に何らかの音でもってそれは終わる。あるいは場所・空間にしても、ここからはある一定の表演空間、神聖な場所なのだというので、そこから先はお客さんが入ってはいけないとか、場合によっては入っていった方がいい場合もあります。そういった時間と空間上の規定の仕方は、別な言葉で言うと結界といってもいいかもしれません。ある一つの結ばれた世界です。そこに当然宗教的な意味合いを持たせるといのは、アジアには非常によく見られます。ですから表演の場合にお供え物があつたり、あるいはお祈りの場があつたりという状況をしばしば眼にしますけれども、それはアジア的な時間と空間の結界をつくる1つのカラーではないかと私は考えるわけです。そうしますと、パフォーマンス・表演が一つのテキストとして成立するわけです。そのテキストというものはある一つの織り込まれたもの、色であったり身体動作であったり、あるいはさまざまなもの、そういったいろんな要素を織り込んでいって一つのテキストを作り上げる。音楽作品、舞踊作品、表演作品というものが出来上がる。

そうしますとここで問題になるのが、それを取り囲むものとしてコンテキストというものがあるわけです。文脈、脈絡。そしてテキストを取り囲む者ものとして当然そこには時間と空間の要素がついてまわります。そして見せる側、聞かせる側と受けとめる側。しかしアジアではしばしばこれが両方混在するといいますか、一緒になることもあります。舞台の上から見せることを目的にするような表演もちろんありますけれども、一緒にみんなですることこそ、オリンピックみたいに参加することに意義があるとか、盆踊りのようにみんなが集まって一緒になる、一つの表演空間を体験するところこそ意味があるような表演芸術というものも当然ありますから、見る側と受けとめる側というふうにはっきりと分けてしまうのはやや危険な面がありますが、図式的には一応分けることができるのかもしれませんが。

さてここから先は、では私たち研究者としてはどういうことができるかということで、ここ何年か私が力を入れているのは映像化する問題です。ビデオの技術が最近非常に進んでいますので、素人でもかなり良いものが撮れるようになってきました。しかし素人はやはり素人の悲しさで、あまり良いものは撮れずに、いい映像を撮るといことは相当の訓練が必要だということを実感します。あとでこの話を終える前に私自身が撮ったビデオをお見せしますけれども、私はあくまでも素人として撮っていますから、いかにそれがまずいかということをもしろ見ていただきたいわけです。

ビデオの映像作品として撮っていくということは相当の訓練が必要で、そういう人材を増やす必要がある。私はすでに歳を取りすぎているし体も弱ってきているから、それにはあまり力を注がない。むしろ若い人に、たくさんの人にトレーニングの機会というものを設けるという形でここ何年かやっています。ラオス、インド、最近ではベトナムといったところでワークショップを開いて、そこで講師として私が呼ばれて、しかし映像作品を作る、ビデオを操作するということになりますとプロが必要ですから、プロのビデオ制作者と組んでやっておりました。私の場合にはちょうど1年ほど前に亡くなったみつプロダクションの高橋光則氏と組んでいろいろやっていたので、そういった経験などを若干ビデオでお見せしたいと考えております。

映像化するという。先ほどお見せしたような時間と空間を超えた、そのオリジナルな時空間を超える形でこれを持っていくことが、映像を作ることによってできる。そうすると受容する側も、思わぬ人たちにそれを観てもらい、味わってもらいということが可能になる。いわゆるユビキタスの世界です。インターネットに載ってしまえば、いろんな不特定多数の人たちが自由にアクセスできる。そういったところにまで持っていくことができる。そしてものによっては、もちろん表演芸術というのは秘密に置いておかなければいけない側面もありますから、何でもかんでもやたらにユビキタスの世界に持って行っていいかという問題は残りますけれども、少なくともそういうことが可能である時代であると思います。ですからさらに新たなコンテキストを、未来的には従来のコンテキストとは違うコンテキストに表演芸術、舞踊と音楽というものを持っていくことが可能ではないかと考えるわけです。

私の話はここまでですけれども、その私の話を例証するということになるのでしょうか、私の撮った下手なビデオをお見せしたいと思います。二つありますが、ミクロネシア・ヤップ島で少女たちが練習している風景をお見せします。その練習風景というのを私は非常に大切なものだと考えています。

- ・ 同じ少女たちが今度は別な立ち踊りを練習していて、左の女性が指導しているところです。これが先生です。体の動きははるかに自然で、上手です。
- ・ 次にインドでおこなった、アジア・ユネスコ文化センターが主催するワークショップで、高橋光則さんと一緒におこなったものです。これは私が撮っているビデオで、高橋さんがもっとプロのレベルで撮っている状況を映しています。これが高橋光則さんが指導しているところです。1年前にお亡くなりになりました。以上です。どうもありがとうございました。

司会 では発表を続けさせていただきます。次のご発表は京都市立芸術大学教授の吉川周平先生による「舞踊表現の東西」です。